『週刊ポスト』2019.9.20(金)発売号

名曲カルテ

昭和歌謡といつまでも

堀井六郎
絵・松本 浦

第93回 「ハマクラ節」を日本語で歌った男性外国人シンガー

昭和53年から10年以上にわたりアイドル歌手が大挙出演、黒柳徹子と久米宏の巧妙な早口司会の魅力とあいまって人気絶大だった『ザ・ベストテン』は、昭和末期を代表する生放送の歌謡曲ランキング番組でした。

実は、同番組開始の10年以上前、昭和40年10月にスタートした『TBS歌謡曲ベストテン』という同じ趣向の歌謡曲ランキング番組がありました（司会は三木鮎郎、構成に大橋巨泉が参画）。時代はまだGS旋風が吹き始める前で、御三家の橋幸夫、舟木一夫、西郷輝彦が頻繁に登場し、中学生だった私は、『雨の中の二人』『高原のお嬢さん』『星のフラメンコ』といった彼らの代表曲を楽しんだものです。

昭和41年頃でしょうか、その『TBS歌謡曲ベストテン』に『涙くんさよなら』という洋楽風の洒落た歌謡曲が毎週登場していた時期がありました。浜口庫之助・作詞作曲による同曲は、坂本九、マヒナスターズ、ジャニーズなど複数の歌手によって競作となった作品ですが、その中で最も売れたのがジョニー・ティロットソン（『キューティ・パイ』『プリンセス・プリンセス』などをヒットさせ、日米で人気の高かった美男シンガー）のバージョンでした。シングル盤のA面は英語、B面は日本語、という販売戦略が秀逸でした。

それ以前にも、歌謡曲を日本語のままで、あるいは途中に英語を挿入するなどしてカバーされた曲がいくつかありました。カテリーナ・ヴァレンテが歌った『恋のバカンス』、ポールとポーラの『二人の星をさがそうよ』、ペギー・マーチの『霧の中の少女』『いつでも夢を』、ブレンダ・リーの『ワン・レイニー・ナイト・イン・トーキョー』といったところですが、女性シンガーばかりで男性外国人シンガーの登場は新鮮でした。コニー・フランシスの場合は、『ヴァケイション』など持ち歌の日本語盤は何曲もリリースしていますが、和製歌謡曲の日本語カバーは見当たりません。

『涙くんさよなら』はジョニーの来日時に『TBS歌謡曲ベストテン』でも歌われましたが、離日すると、今度はマヒナなど別の歌手が出演してこの曲を歌っていました。レコード発売していないはずのダークダックスが登場したこともあり、バス担当のゾウさんが珍しくソロをとっていて、私のお気に入りの『ミスター・ベースマン』で聞かれる黒人シンガー（ロニー・ブライト）や、テレビドラマ『忍者部隊月光』の初期主題歌で聞かれるデューク・エイセスの低音パート（槙野さん）の魅力と重なり、後に私がドゥーワップ音楽にどっぷりつかるきっかけの一つとなりました。

親日家となったジョニー・ティロットソンは、『涙くんさよなら』の同名映画にも出演、その後も山内賢と和泉雅子のデュエット・ソング『ユー・アンド・ミー』（詞・高崎一郎、曲・鈴木邦彦）や、マイク真木の『バラが咲いた』（詞・曲・浜口庫之助）をレコーディング、前例同様、英語と日本語をシングル盤の両面に収録してリリースしています。

ほりい・ろくろう　昭和27年東京都生まれ。慶應義塾大学文学部卒業後は25年にわたる出版社勤務を経て独立。現在は出版社経営の他、ライターとしても活躍。『私的「昭和大衆歌謡考」』第4集『しあわせになろうね』（グスコー出版）が好評発売中